

メッセージアウトライン 創世記16:1～16「神の約束と人の知恵」

[1-3]「アブラムの妻サライは、アブラムに子を産んでいなかった。彼女にはエジプト人の女奴隷がいて、その名をハガルといった。サライはアブラムに言った。『ご覧ください。主は私が子を産めないようにしておられます。どうぞ、私の女奴隷のところにお入りください。おそらく、彼女によって、私は子を得られるでしょう。』アブラムはサライの言うことを聞き入れた。アブラムの妻サライは、アブラムがカナンの地に住んでから十年後に、彼女の女奴隷であるエジプト人ハガルを連れて来て、夫アブラムに妻として与えた」

当時は、正妻に子がいない場合は女奴隷によって子をもうけるという社会的習慣があった。しかし、それは人間的、社会的には許されていたとしても神の目から見たらどうか。主なる神は、そもそも妻に子どもが生まれえない場合には女奴隷によって子どもをもうけてもよいという条件付きでアブラムと契約を結ばれてはいない。ふたりがこのような方法を取ったのは、アブラムの子がどのようにして与えられるのかということについての理解が十分ではなかったからだと考えられる。確かに女奴隷から生まれても、それがアブラムとの間の子であるならば15:4節の「あなた自身から生まれ出て来る者が…」という条件を満たしているように思われる。しかし、一夫多妻というのは神が定められた制度ではなく、人間の側の都合によってできた罪深いものであることを覚えておかなければならない。これはアブラムとサライに大きな問題をもたらすこととなる。

[4-5]「彼はハガルのところに入り、彼女はみごもった。彼女は、自分が身ごもったのを知って、自分の女主人を軽く見るようになった。サライはアブラムに言った。『私に対するこの横暴なふるまいは、あなたの上に降りかかればよいのです。この私が自分の女奴隷をあなたの懐に与えたのに、彼女は自分が身ごもったのを知って、私を軽く見るようになりました。主が、私とあなたの間をおさばきになりますように。』」

アブラムの子をみごもったハガルはサライを見下げるようになった。これはサライの想定外であり、彼女はこのような結果をもたらすようにさせたのは自分であることを棚に上げて夫のアブラムを責めた。サライは神の約束の子がこのハガルから生まれる子であるとの時点では信じていたはずである。したがって、ハガルがこの子の母としての特権をその横柄な態度において主張しだしたので、サライのアブラムの妻としての立場が本質的に脅かされることとなる。それで彼女はアブラムに不平不満を訴えたのである。

[6]「アブラムはサライに言った。『見なさい。あなたの女奴隷は、あなたの手の中にある。あなたの好きなようにしなさい。』それで、サライが彼女を苦しめたので、彼女はサライのもとから逃げ去った」

これはアブラムの割り切った冷たさとかいうものではなく、困惑し、悩んだ末の苦渋の決断であったと考えられる。それでサライはハガルを苦しめ、彼女はサライのもとから逃亡した。

[7-9]「主の使いは、荒野にある泉のほとり、シュルへの道にある泉のほとりで、彼女を見つけた。そして言った。『サライの女奴隷ハガル。あなたはどこから来て、どこへ行くのか。』すると彼女は言った。『私の女主人サライのもとから逃げているのです。』主の使いは彼女に言った。『あなたの女主人のもとに帰りなさい。そして、彼女のもとで身を低くしなさい。』」

ハガルは自分の出身地エジプトへ向かって逃げたようである。「シュルへの道」はエジプト北東の国境近くにあった。ここは「主の使い」が聖書で初めて登場して来る箇所である。サライがハガルを苦しめ、ハガルがエジプトへ逃げてそれでこの物語が終わりになるのではなく、ここに神が干渉されるのである。主人から逃亡中で身重で、しかもエジプトへ逃げてもどうなるかわからないような状態のハガルを神の方が追いかけて見つけてくださったのである。この時、御使いはどのような姿で現れたのであろうか。詳しいことは不明である。

「あなたはどこから来て、どこへ行くのか」これは神の御使いが知らなかったということではなく、彼女の直面している現実の厳しさ、みじめさを彼女に自覚させるための質問であっただろう。ハガルは女主人のもとから逃げていることを伝えたが、御使いは女主人サライのもとに帰って、彼女のもとで身を低くして仕えなさいと言った。そもそもサライに苦しめられたのが彼女の傲慢な態度であったので、もう一度謙遜になって女主人に仕えるべきことを教えたのである。

[10]「また、主の使いは彼女に言った。『わたしはあなたの子孫を増し加える。それは、数えきれないほど多くなる。』」

ハガルが身ごもっているのもアブラムの子であるので、やはり15:5節の契約に基づいて、その子孫が数えきれないほど多くなるということが約束される。

[11-12]「さらに、主の使いは彼女に言った。『見よ。あなたは身ごもって男の子を生もうとしている。その名をイシュマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみを聞き入れられたから。彼は野生のろばのような人となり、すべての人の手も、彼に逆らう。彼は、すべての兄弟に敵対して住む。』」

「イシュマエル」とは「神は聞かれる」という意味。神はハガルの苦しみ、嘆きを聞かれ、この子において慰めと希望を与えてくださったのである。そして彼がどのような人となるかも教えられる。「野生のろばのような人」…飼いならされることを好まない荒々しさを持つ。「すべての兄弟に敵対して住む」…後のアブラムとサライの子として生まれるイサク、またその子孫であるイスラエル民族や他の民族と不仲の関係となる。このイシュマエルは今日のアラブ人の祖先のひとりとなる。

[13-14]「そこで、彼女は自分に語りかけた主の名を『あなたはエル・ロイ』と呼

んだ。彼女は、『私を見てくださる方のうしろ姿を見て、なおも私がここにいるとは』と言ったのである。それゆえ、その井戸はベエル・ラハイ・ロイと呼ばれた。それは、カデシュとベレデの間にある」

「エル・ロイ」…私を見てくださる神。ハガルは自分に語りかけられたのが主なる神であることをここではっきり自覚した。「…うしろ姿を見て、なおも私がここにいるとは」…これは彼女が実際に神のうしろ姿を見てこのように言ったというのではなく、彼女の驚きを強調していると思われる。出エジプト33:20節では「人はわたし(神)をみて、なお生きてすることはできない」とある。ハガルもそれと同じことを考え、しかも自分は生きていて、このように驚きを表現したのであろう。7節ではハガルは泉のほとりにいたとあるが、14節ではそれは「井戸」となっている。それは泉であり、井戸でもあったのであろう。「ベエル・ラハイ・ロイ」…生きて私を見てくださる方の井戸の意。「カデシュ」…カデシュ・バルネアのこと。死海の南西約100kmほどの地。「ベレデ」…場所不明。

[15-16]「ハガルはアブラムに男の子を産んだ。アブラムは、ハガルが産んだその男の子をイシュマエルと名づけた。ハガルがアブラムにイシュマエルを産んだとき、アブラムは八十六歳であった」

ハガルはアブラムとサライのもとに帰った。そして彼女は男の子を産む。アブラムは主の使いがハガルに語った通り、その子をイシュマエルと名づけた。アブラムにとってイシュマエルはこの時点では約束の子と考えていたかもしれない。しかし、それは神の計画を人間の知恵によって実現しようとした結果であり、神のみこころではなかった。彼はこのことによって後に大きな葛藤を味わうこととなる。しかし、なお人間の知恵のもたらしたこのような失敗を通して神のご計画は進んで行く。

私たちもアブラムと同様に、いやそれ以上に失敗をする者である。良かれと思ってしたことが、逆の結果をもたらしたり、多くの苦しみや悲しみを背負い込むようなことになるかもしれない。しかし、主は私たちのそんな弱さ、愚かさをご存じであり、女奴隷ハガルに対したように私たちを心配し、追いかけ、語りかけてくださる。私たちが遠く離れてしまったと思っても、主はすぐそばにいてくださって、私たちを愛とあわれみの目でご覧になっておられる。

神は人間の歴史をご覧になるだけではなく、ついには人となって人間の世界に来てくださった。これが人となられた神、主イエス・キリストである。私たちの愚かさ、弱さ、醜さ、そして私たちの一切の罪のためにご自身が十字架にかかってこれを贖ってくださった。ここに神の愛がはっきりと示されているのである。このイエス・キリストを自分の救い主と信じ受け入れる者は救われ、神の子とされ、新しいのちが与えられ、新しい歩みをすることができる。アブラムばかりではなく、女奴隷ハガルをも愛し、かえりみてくださるこの愛に満ちたすばらしい神を喜び、感謝し賛美する者になろう。→ローマ3:23~24